



図書館だより



国会図書館関西館訪問記

現代がつくった大古墳。のっけから逆説めくが、ひとことで今回の訪問の感想を書けと言われると、その一語に尽きる。

けいはんな。東京の住民、東人の私たちには、耳慣れない地名だ。京都と大阪と奈良を足して3で割ると、京阪奈となる。なるほど、どこからも等分に、へんぴなところ、という意味らしい。京都駅から近鉄京都線急行で約30分、新祝園（しんほうその）駅から15分に1本の巡回バスで10分ほどの、関西文化学術研究都市のまんなか、そこにその建物は突兀と頭をもたげている。遠いまほろば。

知らなかった。東京の国会図書館が1,200万冊でパンク状態に。そこで、2002年10月、ここ関西館がオープンした。2005年10月20日、私たち十余名の合同図書館委員会の訪問団は、立ちすくんだ。

広い。国際コンペで選ばれた設計。地上4階、地下4階。延べ床面積59,500m²。収蔵能力600万冊。車350台の屋外駐車スペースがある。裏手に、さらに拡張予定があり、全部が完成すると、敷地面積82,500m²、延べ床面積165,000m²、収蔵能力2,000万冊の巨大図書館となる。

大通りからモダンな構えの事務棟までの長い長いアプローチ。その両側に広がる高麗芝の前庭の地下1階には、約4,500m²（100m×45m）の総合閲覧室とアジア情報室とがある。

閲覧室内のデスクは、350。資料検索・電子資料閲覧用のコンピュータがほとんどのデスクに据えられている。事務棟と閲覧室をむすぶアトリウムに面して、十数室のコンピュータ付研究用個室があるのが目を引いた。予約をすれば、誰でも使えるのだという。

閲覧室からさらに地下4階へ。途中、静かなはずの

館内にクレーンが作動するような音が伝わってくる。中庭をのぞむガラスの壁越しに、あたりを見回してみよう。造成拡張工事が始まっている様子もない。人工的に配置された疎林の上に、抜けるような秋晴れがあるだけだ。不思議な気持ちになって、地下の書庫に下りる。

書庫は、資料保存のために室温22度、湿度55％に保たれている。一番奥の、地下4階と3階の吹き抜けには、140万冊収蔵可能な自動書庫がある。軌道を走るロボットが、バーコードで管理された資料をコンテナ単位で取り出して来る。そして、地下空間に設えられた通路の中を、遊園地のカートのような無人小型資料搬送車が電動モーターのうなりをあげながら、ゆっくりと閲覧室へ資料を運んでいる。さっき上階で聞いたクレーンのような響きは、これだった。

関西館の一日平均入館者数は274人、東京本館が1,468人（2003年度）。5分の1以下だ。館内は閑散とし、利用者が贅沢な空間を満喫している。遠隔地に住む東京の弁護士の利用方法は、登録利用者となって、ホームページからインターネット経由で文献のコピー申し込みをすることが有益なようだ。

最新の図書が時々刻々、この巨大な地下収蔵庫に埋設される。遙かな未来から見れば、現代の文化の開かれた古墳（形状は方墳）だともいえる。現代にいながらアルカイックな気分をもたらすのは、そこが奈良・京都という土地だというせいもあるだろう。「生きている間に、もう二度と来ることはないだろうな」私たち訪問者の多くが抱いた感想である。

（合同図書館委員会副委員長 野島 正）